

田坂憲二・田坂順子編著『藤原義孝集 本文・検索 と研究』

福井, 迪子
筑紫女学園大学教授

<https://doi.org/10.15017/11957>

出版情報：語文研究. 65, pp.70-70, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《紹介》

田坂憲二 編著『藤原義孝集 本文・索引と研究』
田坂順子 編著『藤原義孝集 本文・索引と研究』

福井 迪 子

本書は「あとがき」に記されるように大学院時代の演習で『藤原義孝集』を学び感銘を受けた著者が、その後それぞれの職場で細川文庫本・正安本を底本に同集の演習を担当し、読みを重ねるうちに互いに切実に感じた種々の問題点について、丹念に諸説の再検討・研究を重ねた結果に立って、役割を分担（校本・索引編を順子氏・研究資料編を憲二氏・研究論文（一）（二）（三）は昭和60年9月・61年9月に発表）し、まとめられたものである。基本的な、文献学上必要欠くべからざる一書であることは言うまでもない。同集については62年4月、高橋正治氏の『校本藤原義孝集目録』（新典社）が刊行されており、著者も述べる如く両者の見解にはかなり隔りがある。両論を検討しつつ『義孝集』研究は今後一そう前進することであろう。構成は、本文篇・索引篇・研究篇・資料篇より成っている。以下順を追って簡単にしながら内容を紹介しよう。

本文篇 一類本系統校本——九大附属図書館蔵伝光源筆細川文庫本を底本とし、榊原本・清泉女子大本・群書類従本・京大本で対校。
二類本系統校本——書陵部蔵正安元年奥書転写本を底本とし、書陵部甲・乙・丙本・手鑑「世々の友」所収「義孝集切」で対校。

索引篇 細川文庫本を底本とし、底本傍記部分の語彙・正安本特有語彙をも加えての「歌語索引」「詞書索引」及び「和歌五句索引」。見出し語の表記は歴史的仮名遣いに統一、意味識別の便をはかり（一）内に漢字を宛るなど細部にわたり利用者への配慮がある。

研究篇『義孝集』本文考（一）——細川文庫本系諸本の再検討——従来の研究を鳥瞰、群書類従本并に彰考館本について再検討し従来の

見方を是正、筑波大本も彰考館本と同様群書類従本よりの派生とみる。また榊原・松平本の親子関係説を補強。結局、一類本系統は、（一）細川本・榊原本・松平本。（二）群書類従本・彰考館本・筑波大本。（三）京都大学本（混態本）の三群に分けられるとの見解を示される。

『義孝集』本文考（二）——勅撰集・私撰集所収歌を中心に——二類本を代表する正安本・乙本が他文献にどのように引用されているかの検討により、その系統分化の萌芽時点を探り、どの系統の本文が勅撰集材料となったかを検討、後拾遺集以下中世では正安本文が広く流布していたらしいことを得る。しかし末尾の往生説話部分が現存義孝集・後拾遺集・大鏡が共通のものに材を得ているらしいことから、或はそれが『本朝書籍目録』に見える『義孝日記』の存在ではなかったかと言及する。

『義孝集』本文考（三）——一類本・二類本の関係——正安本は、従来いわれる如く「細川文庫本を基に改変したものか」についての再吟味。脱落歌・歌順・その他漢詩摘句の位置等種々の問題点から「細川本を基に意図的に改変された本文ではありえない」の結論に至っている。

『義孝集』本文考（四）——伝本系統図の想定——前三稿の検討を通して、一類本九本・二類本五本の系譜を図式化。一類本・二類本の最善本たる細川文庫本・正安本を比較すると、書写年代の古さ、和歌配列等家集としての完成度、現存本文の損傷度等から細川文庫本が優位との結論に至っている。以上の検討をふまえて作成されたものが本文篇である。

資料篇『義孝集』所収歌・漢詩の他文献への採取一覧を示す。

細大もらさぬ周密丹念な調査と従来の学説再検討から導き出された優れた成果であることを重ねて記しておきたい。

（昭和六十二年十二月、和泉書院（和泉書院索引）（叢書12巻））、A5判、四八〇〇頁）